

アーカイブズにおける ミニコミ資料利用の展開の可能性

——ミニコミ資料「ブーゲンビリア」の事例分析から

野口 由里子

はじめに

- 1 ミニコミの歴史
- 2 所蔵ミニコミ資料の概要
- 3 ミニコミ資料の利用事例

おわりに

はじめに

環境アーカイブズでは、「受入番号 0042 東京都立多摩社会教育会館旧市民活動サービスコーナー所蔵資料」（以下、ミニコミ資料）を所蔵している。ミニコミとは、「『マスコミ』という大きなジャーナリズムに対する、Mini Communication Media という和製英語の略」だと言われている（南陀楼 1999：10）。そして「パーソナル・コミュニケーションとマス・コミュニケーションとの間の広大かつ複雑多様な中間領域のコミュニケーション全体」のこともである（田村 1976：4）。さらに狭義の意味では、「送り手（作り手）の内発する造語活動の延長として何らかの手造りの要素が加わり、特定の人々へのメッセージを伝える活動、またはそのメディア」であり、具体的には「個人誌、サークル誌、ローカル誌、住民運動やマイノリティの新聞などが入る」（田村 1977：11）。

ミニコミの整理・収集を行っていたことで知られる「住民図書館」の所蔵資料は、埼玉大学に引き継がれたのち、2010年から立教大学共生社会研究センターが所蔵することになったが、環境アーカイブズのミニコミ資料は、「東京都立多摩社会教育会館市民活動サービスコーナー（以下、サービスコーナー）」が整理・収集を行っていたものである。その資料内容は、各地域の公民館だよりや広報誌、消費者運動ニュース、反核や環境保護のほか、生涯学習など多岐にわたっているものの、他の所蔵資料に比べ、閲覧利用者が多いとは言えないのが現状である。

一方、前述の共生社会研究センターでは、主に研究資料として利用されている（平野 2013）。同センターでは、社会学部及び文学部の学生を対象とした演習科目で、ミニコミを読み込み、そこから手がかりを得るという利用を行っている。また、大学院以上の学生や研究者も研究目的で利用している。

同じように、環境アーカイブズでもアーカイブズとして資料をレファレンス・提供している以

上、研究資料としての利用を初めに考えることになる。

ところで、ミニコミの調査および研究を手がけた田村紀雄によれば、ミニコミに関する研究アプローチは「現実の研究者とそれを支える社会（民衆）の関心や意識に左右され」、主に3つあるという（田村 1976：9）。一つは、「近代日本での小新聞・小雑誌の出現に始まり現在に至る思想史の流れの中でミニコミを把握しようとする」思想史的研究である（ibid.）。次に、「ミニコミが民衆の言論の自由のなかでも『知らせる自由』の表出行為であると考え」た時、輸送・郵送をふくむ流通の諸問題を解明しようとする政治学的研究である（ibid.）。最後に、「現代社会におけるミニコミの役割、マス・メディアとの関わり、つくり手の分布、階層、意識、読み手の階層、意識、内容分析、ユース・カルチャー内での位置づけ、住民運動、社会運動とのかかわり、都市化や郊外化との相関、社会移動とメガロポリス化とミニコミ etc., といったテーマの研究」が多い社会学・社会心理学的研究である（ibid.）。

そこで、本稿では、執筆者の研究領域である社会学的観点から、ミニコミの研究利用に関するひとつの可能性を模索してみたい。

1 ミニコミの歴史

本節では、ミニコミの歴史について確認する。

「ミニコミ」という言葉は、1960年の日米安全保障条約（以下、安保）をきっかけに広がったといわれる。しかし、小さなメディアという意味での「ミニコミの様なもの」は、それ以前から存在しており、その歴史は、明治期まで遡ることができるという（丸山 1992a：10）。それらは、文学や川柳の分野において、個人や団体による同人誌や個人誌・個人通信として全国各地で発行されていた（南陀楼 1999）。

例えば、この時期に発行されたミニコミとして、ジャーナリストの宮武外骨の『滑稽新聞』（1901年から1908年）、「柳誌」と呼ばれる川柳の同人誌、岸本水府らの『番傘』（1912年より現在も継続して発行）や弁護士正木ひろしによる『近きより』（1937年から1949年まで発行）などが挙げられる。

1950年代には「戦後最も早く小さな言論を行使した人たちの最初の挫折の時点」であり、「企業や職場を迫られた『もの書き』たちや、その職場にさえたどりつけなかった学生運動の参加者たち」の流入先として、このメディアが用いられるようになった（田村 1977：15）。さらに1960年代になると、安保反対運動を進める場としてミニコミが発行されるようになる。

ミニコミ・ムーブメント

前述の田村は、「ミニコミは、社会の何らかの変わり目を節にして」、「社会が大きく流れを変えようという歴史のフシに、人々が活況を呈し百花斉放を示し、ミニコミもまた急激に増殖される」と指摘する（田村 1977：15）。

そこで、1960年代から1990年代の「歴史のフシ」に着目しながら、ミニコミの歴史を見ていくことにする。

(1) 1960年代

すでに述べたように、この年代は「ミニコミ」という言葉が生まれた時期であり、安保条約をめぐる国民運動との結びつきの中でミニコミが発行されるようになった⁽¹⁾。

例えば、「ベトナムに平和を！」市民連合（以下、ベ平連）は、1965年に活動を開始し、機関紙『ベ平連ニュース』（1965年から1974年）を発行した。また、各地の地域ベ平連によって、100種類近いミニコミが発行されている（丸山1985a：85-87）。ベ平連以降、米軍基地内で起こった反戦運動を支持した『脱走兵通信』、1960年代末から1970年代にかけて『週刊アンポ』が発行される。

一方で、安保運動を「挫折」としてとらえた青年がもの書きとなり、「日本経済の成長の波に乗って」発展した企業や労働組合の「社内報か労組機関紙にその仕事を見出すようになった（田村1977：16）。

(2) 1970年代

この時期には、「従来にないミニコミが巷にあふれ」ようになる（ibid.）。例えば、アングラ新聞のような、内容だけでなく「内容以上に形式、レイアウト、表現方法、タイプフェイスなどでの逸脱、試行、実験に力点がおかれ」、「スチュデント・パワーに代表され」た「大規模な文化的反乱」ともいべきミニコミが数多く発行された（ibid.）。

その内容を大別すると、四日市公害を批判した『公害トマレ』などの公害運動に関するもの、女性解放を主張した『女・エロス』のように女性問題に関するものがある。その他、環境保護や障害者福祉、さらに、若者を中心とした「既存の文化やジャーナリズムに反抗する動き」などにもテーマが分化し始める（南陀楼1999：14）。その背景として、1950年代から続く公害の発生やウーマンリブの受容などがある⁽²⁾。

一方、1970年代後半には、キャンパス誌や演劇などの集団が発行するミニコミや音楽・映画のようなジャンルごとのもの、個人の趣味を反映したものなどが増加してきた⁽³⁾。

(3) 1980年代

1980年代に入ると、「これまでアンダーグラウンドな場所でしか取りあげられなかったようなマンガや音楽、SFなどのマニアックな記事が普通に商業誌に載るようになる」（ibid.：16）。これ以前のミニコミは、いわゆる「マス」メディアに対するもの、ここでしか読めない情報を発信する目的で発行されていたが、ここに至って、「マスコミとミニコミ、メジャーとマイナー、メインカル

(1) 渡辺潤『生きるためのメディア図鑑』（1981）の「ミニコミ年表」では、1964年に初めて『ミニコミ』という誌名を見ることができる。

(2) 例えば、ウーマンリブにおけるミニコミの役割について論じた辺輝子は、1970年11月から翌年8月までの間に開催された第1回「ウーマン・ティーチ・イン」や合宿に関する新聞・週刊誌・女性誌の報道分析を行い、「リブ実践者自身の手になるミニコミ」が「リブ論の本格化作業」の一端を担ったと指摘している（辺1976：72-73）。

(3) 例えば、この時期に創刊されたミニコミで注目されるものは、目黒考二と椎名誠による『本の雑誌』である。これは、「本が好きだ」という若者たちが書評とブックガイドを発行したもので、「新聞や雑誌の書評欄では取りあげられないような本や雑誌を積極的に紹介した」（南陀楼1999：15）。また、『びあ』のようなカルチャー情報誌が誕生したのもこの時期である。

チャーとサブカルチャーは交換可能なモノになっている。この先、前者と後者のあいだにあるわずかな差異を楽しむことが、メディアへの関わりかたになっていく」(ibid.)。

また、アマチュアのマンガ作品を載せた「同人誌」を販売する場として、「コミックマーケット(コミケ)」が始まったのは、1970年代半ばであり、1980年代に入ってから、参加する人々が増加していく。この背景として、ワード・プロセッサ(ワープロ)やコピー機の普及によって、印刷手段が安価となり、かつ手軽になったことがあげられる⁽⁴⁾。

(4) 1990年代

1990年代半ば頃からインターネットの普及により、個人でホームページを持ち、情報を発信することが可能になった。そのためミニコミの形態も変化し、引き続き紙のミニコミを発行する一方で、ホームページを作り、情報を発信する人々が増加してくるようになる。反対に、サイトを通じて集まった人々が紙のミニコミを発行する場合もあったという(やみたけ1999)。この時期になると、個人の関心を発信していくものが増加し、ミニコミは、「一人一ジャンルと呼べる」ほどに細分化、多様化する(南陀楼1999:20)⁽⁵⁾。

なぜミニコミはつくられるのか

それでは、なぜこれらのミニコミは、つくられてきたのであろうか。すでに述べたように、ミニコミといっても、活字として残すことが生きている証とする、発言の自由を確保するためなど出ず人によってその目的や内容が異なる。ゆえに、個々のミニコミについてそれぞれ発行理由を問うことは簡単ではない。そこで、ここでは二つ言及しておくことにする。

一つは、「マスコミが企業として巨大化していき、言論性を低下させていったことへの反作用」として、「市民が市民のためのメディアを持つため」にミニコミをつくるのだという(丸山1985b:30)。そして「マスコミの受け手であった市民が、みずからメディアを持って身近な人びととのコミュニケーションを開始し」始めた(ibid.:30-31)。

二つには、ミニコミは、つくり手と読者の距離がきわめて近く、また「ヒトに自分の問題を伝えるためのメディアであるが、それを出すこと自体がコミュニケーション」にもなるからである(南陀楼1999:21-22)。

2 所蔵ミニコミ資料の概要

前節では、ミニコミの歴史について年代別に確認した。次に、環境アーカイブズで所蔵しているミニコミ資料について見ていくことにする。現在所蔵しているミニコミは、1950年代から2002年

(4) ワープロが普及する以前のミニコミは、鉄筆で原稿を書き、インキをつけたローラーで印刷する、いわゆるガリ版(孔版)印刷やタイプ孔版印刷、軽オフセット印刷などの方法でつくられていた(田村・志村1985)。

(5) なお、ミニコミだけではなく、自分史や自身の経験を綴った手記などが自費出版されていくのも1990年代に入ってから見られる特徴である。その背景としては、自費出版の大手である新風舎が1994年に、続いて文芸社(1996年)が設立されたことが指摘できる。

（一部の資料については2004年まで）に発行されたものである。

2016年5月現在、4,667ファイルが目録化され、そのうち3,775ファイル分の目録が環境アーカイブズのウェブページに公開されている⁽⁶⁾。現在は、目録が公開されているミニコミ資料を保存する作業も並行して行っている。ただし、これは、受け入れた段ボール500箱のうち、約220箱分の資料（主に冊子やチラシの形態のもの）についてであり、残りの資料（主に図書）の公開時期は未定である。それでは、所蔵ミニコミ資料の概要として、所蔵に至った経緯とその内容について、述べておくことにする。

収集・保存の主体

同資料室で所蔵しているミニコミ資料は、美濃部都政時代（1972年）に、東京都が多摩社会教育会館に開設した「市民活動サービスコーナー」によって収集された。同サービスコーナーは、「反公害運動をはじめとする住民運動、市民運動の高揚を背景に」「『主権者意識の涵養』のための社会教育の施策として設けられた」（平川2002：91）。ここでは、市民活動団体の活動への援助や相談サービスなどを行う一方で、「その活動の一環として市民活動資料の収集事業」も行っていった（杉山2014：3）。しかし、同サービスコーナーは、2002年に廃止され、1972年から2002年までに収集された段ボールにして「500箱分の資料が廃棄、捨てられかねない状況に立ち至った」のである（ibid.）。

資料の所蔵経緯

前述の市民活動サービスコーナーが廃止された後、これらのミニコミ資料を保管するために「市民活動資料室を考える会連絡会」が2003年に発足した。3年後、同連絡会をもとに「市民活動資料・情報センターをつくる会（以下、つくる会）」が発足し、これらの資料についての学習会やシンポジウムなどを開催しつつ、資料センター開設を模索し続けた。そして、NPO法人「市民活動サポートセンター・アンティ多摩」と「資料センターの会」が共同で「ミニコミ広場」を開設したのは、翌年の2007年のことである。他方で「市民活動資料センター基金」を発足（2010年）させ、募金活動を行った。この募金で集まった資金をもとに、「ミニコミ広場」を発展させ、新たに「市民アーカイブ多摩」が開設した（2013年）。

現在「市民アーカイブ多摩」では、同サービスコーナー廃止後の2002年以降に発行されたミニコミを継続して収集しているが、2002年以前までに収集・保存されていた資料については、「つくる会」が資料の受入機関を探しつつ、資料館をつくる方向も模索していた時期（2010年）に環境アーカイブズの前身にあたる「サステイナビリティ研究教育機構（以下、サス研）」との接点から、寄託に至ることになった（2015年「寄託」から「寄贈」⁽⁷⁾）。

(6) 未公開分の目録（892ファイル）に関しては、今年度中の公開を目指している。

(7) 「市民活動資料・情報センターをつくる会」から「サステイナビリティ研究教育機構」に寄託及び寄贈された経緯については、江頭（2014）、杉山（2014）、山家（2014）に詳しく述べられている。

現在行っている整理・保存作業

環境アーカイブズでは、資料の受け入れを行った2012年以降、ミニコミ資料の整理を開始した。2014年度には、図書以外の資料についての目録入力（約45%）が完了した。2015年度からは、入力が完了した資料の保存作業を行っている。なお、環境アーカイブズでは、新たな資料の受け入れを行っていないため、これらの作業は寄贈を受けた段ボール500箱について行う予定である。

昨年度より行っている保存作業は、次のような段階で行っている。まず、①段ボールより資料を出し、②フラットファイルから資料を外し、クリップ、ホッチキス針がある場合は、それらを取る（クリップやホッチキス針もサビなどの原因となり、資料に傷みが生じるためである）。これは、段ボールは酸性であるため、資料保存には適していないからである。次に、③紙こより、ファイバースティックファスナーで、資料を綴じる。傷みがあるものや装飾のあるものは、クリアポケットを使って保存する⁽⁸⁾。最後に、④1ファイルずつ中性紙封筒に入れ、封筒に資料の番号を記入した上で、文書箱へ入れ、保管する。

今年度は、このような保存作業を行いつつ多くの資料の閲覧利用ができるよう、目録の修正作業と図書に関する目録入力作業も行っている。

所蔵資料の内容と特徴

それでは、所蔵資料の内容と特徴を挙げておこう。

最も多くみられるのは、「社会教育・生涯教育」に関するものである。例えば、「稲城市の社会教育を考える会ニュース」（「稲城市の社会教育を考える会」発行）や「東京都青梅青年の家」（「東京都青梅青年の家」発行）、「くにたち公民館を考える会ニュース」（「くにたち公民会を考える会」発行）などのように、市町村単位や公民館などの地区単位で発行されたものである。

次に、「女性問題」「障がい者問題」や「福祉運動」に関するものが多く見受けられる。「女性問題」では、シャドウ・ワークを扱ったもの（「シャドウ・ワーク研究会」発行の「シャドウ・ワーカー通信」）や女性の地位向上や学習を目的にした「ふいふてい」（「八王子手をつなぐ女性の会」発行）などがある。

「障がい者問題」では、「とうきょう青い芝」（「日本脳性マヒ者協会東京青い芝の会」発行）や「日野市障害者問題を考える会」発行の「ユノープ」がある。特に、障がい児童を特別支援学校ではなく、通常学級に通わせることを希望する保護者の運動に関するものが多い。

「福祉運動」に関するものでは、社会福祉協議会が発行する「社協だより」やボランティアセンター発行の「ボランティアセンターだより」がある。

上記以外では、「高齢者問題」や「児童福祉」などのような各種問題を提起するものや、図書館などの「文化施設」が発行するもののほか、「芸術・スポーツ」などの文化活動について発信しているものがある。

以上のように所蔵資料の特徴を見てみると、前節のミニコミ・ムーブメントにおいて、ミニコミ

(8) ミニコミ資料は、手作りのものが多く、押し花やあぶり出し、ラメなどを用いて装飾を施したものも見ることができる。

で扱われるテーマが推移していったのとはほぼ同じ過程を辿っていることがわかる⁽⁹⁾。

3 ミニコミ資料の利用事例

本節では、ミニコミの社会的な活用事例について述べていくことにする。ミニコミを用いた社会学的研究の多くは、市民社会運動論の立場から行われたものである（荒井 2014；町村 2012）。そこで本稿では、これらの立場とは異なり、環境アーカイブズが所蔵しているミニコミ資料のひとつである「ブーゲンビリア」を「素材」とし、簡易整理法を用いて考察を試みることにする⁽¹⁰⁾。

分析手法

本稿では、簡易整理法（水野 2000）を用い、分析を行った。なお、手法は、生活史や「個人現象」に関心を持つ社会学者水野節夫が「KJ法」や「GT（Grounded Theory）」を参考にしながら、独自に考案した整理法である。水野によれば、作業のステップは、「(a) この手法を使って各素材部分について、『一行見出し』を作成する」、「(b) 『一行見出し』をまとめあげ、関連・小グループ（KJ法でいうところの「小グループ編成」にあたるはずのもの）を作り出す」、「(c) 関連・小グループの各々について小見出しをつける」というものである（水野 2000：335-336）。

「ブーゲンビリア」の概要

「ブーゲンビリア」は、「内田絵子と女性の医療を考える会」によって1998年3月に創刊された。当初は隔月で発行されていたが、2015年からは年3回の発行になった乳がんを中心にしたがん患者会の会報誌である⁽¹¹⁾。同誌は、現在も発行が継続されており、通巻で194号に達している（2016年1月時点）。なお、誌名の「ブーゲンビリア」とは、「赤道直下の空の下で、明るく自己主張しながら咲き乱れる花」のことである（創刊号「内田絵子よりみなさまへ」）。

発行元である「内田絵子と女性の医療を考える会」は、東京都立川市の主婦内田絵子が1994年に乳がんになり、夫の勤務地であるシンガポールで乳房を切除、治療を行い、帰国した後に発足させた。同会は、2004年に「NPO法人ブーゲンビリア」と改称し、現在も「学び」「癒し」「国際協力」「提言活動」を柱として活動している（「NPO法人ブーゲンビリア」ウェブページ。2016.05.02）。

(1) 発行者 内田絵子について

内田は、同会の発足前に、乳がんの体験を闘病記『メイド・イン・シンガポールのおっばい』

(9) 所蔵のミニコミ資料には、図書館が発行したものが多くみられるが、これは元の収集主体であるサービスコーナーの活動方針によるものである。

(10) 受け入れ番号 0042-0117, 0042-1791（「環境アーカイブズ」ウェブページ。2016.05.02）。ただし、前者の目録は、公開されており、閲覧可能であるが、後者の目録は未公開のため、現在のところ閲覧を受けつけていない。

(11) ただし、2001年と2002年は、毎月発行されている。

(1996)として出版し、後に『おっぱいが二つほしい 私が選ぶ乳房再建』(2001)を出版した⁽¹²⁾。前者は、闘病時に内田が綴っていた「ガン日記」をもとに、乳がん摘出手術の2年8ヶ月後に出版された。この闘病記録は、内田が出版元である北水の女性スタッフに日記の存在を明かし、話しているうちに出版に至ったという(内田1996:193)。結婚する以前の内田は、幼稚園教諭として勤務しており、ボランティア活動や児童文学の創作を「ライフワーク」として行っていた(ibid.)。

また、2004年に同会をNPO法人化した際には、理事長として就任したほか、2007年からは「キッサーネットジャパン」の理事(2012年まで)、「東京都女性がん対策委員会」や「東京のより良いがん医療をつくる会」の立ち上げ、『月刊がんサポート』で連載など、東京都や多摩地域のがん医療に関する活動を中心に行っている。

(2) 所蔵資料「ブーゲンピリア」の内容と背景

環境アーカイブズが所蔵している「ブーゲンピリア」は、ボランティア特集号を含む創刊号から33号(1998-2002)のほか、学習会のお知らせ・資料、講演会ポスターなどである(ファイルレベル。表1)。

そこで、会報誌「ブーゲンピリア」の内容に着目してみよう。その内容を分類すると、①講演会・学習会に関するもの(開催案内、会の内容や感想)、②会の運営に関するもの(スタッフの挨拶・エッセイ、年度の収支報告書、記念パーティーの報告、寄付金名簿)、③がん、生死について考える、④内田絵子の闘病記の紹介・引用(内田出演のテレビ番組の紹介も含む)、⑤ボランティア活動に関するもの(寄付の求め、ボランティア活動報告)、⑥内田絵子または夫のエッセイ、⑦広告(広告の募集も含む)に大別される。

次に、「ブーゲンピリア」の発行時期(創刊号から33号まで。1998年から2002年)の乳がん・がん事情を確認しておく。この時期の日本では、現在の治療法とは異なり、乳房を温存するのではなく、乳房を切除する方法が主流であった⁽¹³⁾。また、日本では聖ヨハネ会桜町ホスピスの山崎章郎医師(当時)が『病院で死ぬということ』、『ここがぼくたちのホスピス』を出版し、ホスピスケアに高い関心を持たれるようになった時期でもある(山崎1990, 1993)。

さらに、日本において乳がんが女性の悪性腫瘍罹患率で1位になったのは、1996年であり、同年の乳がんによる死亡者数は、7,900人であった⁽¹⁴⁾。これは、交通事故による死亡者数を上回る数である。また、乳がんは、闘病期間が長く、他のがんに比べ独自の経過を経る。というのは、抗が

(12) 現在、「闘病」すなわち、病いと闘うという言い方は、以前に比べ使用されなくなりつつある。というのは、現在では、病いは闘う対象ではなく、共存するものと捉えられてきているからである。しかし、本稿では、現在でも「闘病記」と呼び表されている点を鑑み、発病から治療、回復または死までの過程を「闘病」としておく。また、その過程における、治療や日々の記録、その時々思索などを出版したものを「闘病記」としておく。

(13) 日本では、フランスやイタリアに比べ、乳房温存療法への移行が遅く、乳房切除(ハルステッド手術)は、「定型的乳房切除術」と呼ばれる乳房と胸筋、腋の下のリンパを切除する方法と、胸筋を残し、乳房とリンパ節のみを切除する「非定型的乳房切除」が1990年代まで行われていた。なお、内田が手術を受けた1994年当時、前者の療法を取る場合は少なくなっている。

(14) 国立がん研究センターがん対策情報センターが提供している「がん情報サービス」によれば、1998年から2002年までの乳がんの死亡者数は、8,589人(1998年)、8,882人(1999年)、9,171人(2000年)、9,654人(2001年)、9,604人(2002年)と推移している。

ん剤や放射線療法なども比較的効果的で寛解者として生きる期間が長く、触診による自己診断を行うことでがんの発見ができるからである。

以上のことから、闘病記の出版や会報誌の発行、患者会での活動などを行う人々が多く、「ブーゲンビア」の活動もそのひとつといえよう⁽¹⁵⁾。

表1 ミニコミ資料「ブーゲンビア」の内容一覧

アイテム数	分類	タイトル	発行年月日	備考
通し番号 0042-0117				
1	チラシ	内田絵子と女性の医療を考える会 第二回学習会のお知らせ		
2	資料集	内田絵子と女性の医療を考える会 第二回学習会の資料		
3	チラシ	命のかがやき『メイド・イン・シンガポールのおっばい』より		内田絵子のプロフィール紹介
4	入会 申込書	内田絵子と女性の医療を考える会 入会申込書		
5	チラシ	内田絵子と女性の医療を考える会 設立趣意書およびご寄付のお願い		
6	資料集	内田絵子と女性の医療を考える会 資料1 21世紀の医療ルネッサンス 乳がん治療	1998.09	読売新聞の記事のコピー
7	チラシ	内田絵子の講演会のご案内		
8	会報	ブーゲンビア創刊号	1998.03.07	
9	会報	ブーゲンビア5月号	1998.05.07	号数表記なし。発行年月日より 2号と思われる
10	資料集	内田絵子と女性の医療を考える会 資料2 乳房再建とは	1998.11	
11	チラシ	内田絵子と女性の医療を考える会 一周年記念講演会		講演者 依萌子
12	チラシ	内田絵子と女性の医療を考える会 第四回学習会のお知らせ		
13	会報	ブーゲンビア3号	1998.07.07	
14	会報	ブーゲンビア4号	1998.09.07	
15	会報	ブーゲンビア5号	1998.11.07	
16	資料集	内田絵子と女性の医療を考える会 資料3 乳ガンを学ぶ	1999.01	
17	ポスター	内田絵子と女性の医療を考える会 一周年記念講演会		
18	チラシ	第12回『節薫の会』のご案内		「節薫の会」との共催企画。 講師は依萌子
19	会報	ブーゲンビア6号	1999.01.07	一周年記念特別号
20	会報	ブーゲンビア7号	1999.02.07	依萌子先生 一周年記念講演会 特集号
21	会報	ブーゲンビア8号	1999.03.07	台北講演会記念号
22	会報	ブーゲンビア10号	1999.07.07	
23	会報	会報誌ブーゲンビア ご案内版 向き合って、あなたと乳がん	1999.07	

(15) 例えば、図書館司書を中心に、公立図書館や病院図書館に闘病記のみを集めた書架（闘病記棚）を設置する活動を行っている「健康情報棚プロジェクト」が作成した「闘病記リスト」によれば、乳がん闘病記は、46%を占めている。

24	会報	ブーゲンビア 11 号	1999.09.07	
25	資料集	内田絵子と女性の医療を考える会 資料 4 乳ガンとは	1999.10	
26	チラシ	内田絵子と女性の医療を考える会 第 10 回学習会のお知らせ		
27	会報	ブーゲンビア 12 号	1999.11.07	
28	会報	ブーゲンビア 13 号	2000.01.07	
29	資料集	内田絵子と女性の医療を考える会 資料 5 乳ガンの治療	2000.03	
通し番号 0042-1791				
30	会報	ブーゲンビア 14 号	2000.03.07	
31	会報	ブーゲンビア 15 号	2000.05.07	
32	会報	会報誌ブーゲンビア ご案内版 向き合って、あなたと乳がん 第 2 版	2000.05	
33	チラシ	内田絵子と女性の医療を考える会 第 13 回学習会のお知らせ		
34	会報	ブーゲンビア 16 号	2000.07.07	
35	資料集	内田絵子と女性の医療を考える会 資料 9 ガン情報, 何を信じたらよいのか?	2000.08	
36	チラシ	国際ソロプチミスト立川 内田絵子講演会		
37	会報	ブーゲンビア 17 号	2000.09.07	
38	会報	ブーゲンビア 18 号	2000.11.07	
39	会報	ブーゲンビア 19 号	2001.01.01	
40	会報	ブーゲンビア 20 号	2001.02.01	
41	会報	ブーゲンビア 21 号	2001.03.01	
42	会報	ブーゲンビア号外	2001.04.01	
43	会報	ブーゲンビア 22 号	2001.04.01	
44	会報	ブーゲンビア 23 号	2001.05.01	
45	会報	ブーゲンビア 24 号	2001.06.01	
46	会報	ブーゲンビア 25 号	2001.07.01	
47	資料集	内田絵子と女性の医療を考える会 資料 10 更年期と骨について	2001.07	
48	会報	会報誌ブーゲンビア ご案内版 向き合って、あなたと乳がん 第 3 版	2001.08	
49	会報	ブーゲンビア 26 号	2001.08.01	
50	会報	ブーゲンビア 27 号	2001.09.01	
51	会報	ブーゲンビア 28 号	2001.10.01	
52	会報	ブーゲンビア 29 号	2001.11.01	
53	会報	ブーゲンビア 30 号	2001.12.01	
54	会報	ブーゲンビア 31 号	2002.01.01	
55	チラシ	第 21 回勉強会のお知らせ		
56	チラシ	「絵子の会」設立 5 周年記念 第 1 回シンポジウム & 親睦会のご案内		
57	会報	ブーゲンビア ボランティア特集号	2002.03.01	号数表記なし。発行年月日より 32 号と思われる
58	会報	ブーゲンビア 33 号	2002.03.01	

「ブーゲンビア」の考察

それでは、「ブーゲンビア」の考察を行うことにする。いくつかの考察が可能であると思われるが、本稿では、顕著に見られた①「ブーゲンビア」における乳房と乳房喪失の意味、②医療バ

ターナリズムに対する提言，③「絵子のティータイム」と個人現象の3点について述べる⁽¹⁶⁾。

「ブーゲンビリア」における乳房と乳房喪失の意味

「ブーゲンビリア」では、乳房と乳房喪失に関する記述が見られる。内田は、「乳房は愛といつくしみがいっぱいだった命の源です。それをもぎ取られる悲しみは何とも言葉では表現しがたいもの」（創刊号）と述べている。また、ある会員は、乳房温存の手術が世界的には主流になっていたことを知らず、医師に言われるがまま乳房切除をしてしまった俵萌子の経験を聞いて「俵萌子さんは講演の中で『私は無知だった』とおっしゃった。私も無知だ」と表現している（7号）⁽¹⁷⁾。

そもそも乳房は、切除しても生命に別状はないとして、医学的に軽視されてきた経緯がある。これに対し、内田は「たかがおっぱい、されどおっぱい」と反論する（4号、5号、6号）。また、別の会員は「自分のおっぱいが無くなってみると無くなったおっぱいがいとoshi」（33号）、「物理的に片方無いと交錯しなくてはならないから不便と言うだけでなく、女性の心理を思いやるような方向に発展して行ってほしいと願っている」（10号）と記している。

女性のシンボルとされる乳房を切除することは、女性としての意識を改めて呼び起こすことになる。なぜならば、乳房は可視的な部分だからである。そして、「乳房が二つ揃っていること」へのこだわりがあらわになってくる。

例えば「ブーゲンビリア」の30号では、「絵子の会」の会員たちが温泉へ行った企画について報告されている。温泉では、乳房を「再建した方にじっくり見せていただいたり、いろいろお話も聞けたりで、まさに『裸のお付き合ひ』」をすることができ、「手術以来遠ざかっていた温泉に、こんなに気持ちよく入れるなんて……、本当に極楽」と記されている⁽¹⁸⁾。

このように「ブーゲンビリア」を通して浮かび上がってくるのは、「正常」で「普通」の女性の身体から逸脱してしまったという苦悩と生命の危機に対する不安である。

医療のパターナリズムに対する提言

乳房や乳房喪失についての記述のほかにも、「ブーゲンビリア」の発行初期には「患者には、医学的知識が欠けているため、患者は医者にすべてを委ね、医者が最も患者のためになると思われる治療を施す」というパターナリズム的な医療に対する提言が行われていた（医療人類学研究会編1992：126）。

当初「医療の主役は患者自身であるということ」（創刊号）、「医療の主役は私、そしてあなた！」

(16) 「個人現象」とは、「ある特定の《個人》をその人なりの特徴を持った存在として成り立たせている諸事情や諸契機」を析出することによって現れるもののことをいう（水野2000：7）。これらの析出を行う理由として水野は、「とりわけ1980年代以降の《自分探し》ブームに象徴されるように、『個人』とか『自分』とは何かということがとらえにくくなっているという時代状況があるように思う」と述べている（ibid.）。

(17) 俵萌子は、65歳の時に乳がんのため、右の乳房を切除した。その経験を闘病記『癌と私の共同生活』に綴っている（俵1997）。俵は、乳房切除について「あまりに惨い出来事」と言い、「世の中には諦められることと諦められないことの二つがある。今までの人生で“諦められないこと”をいっさいもたなかった私が、はじめて“諦められないこと”と出会った。それが、“乳房を切りとられた”ことだといっていい。『無念』という言葉の実感を知った。今なお無念を噛み締め続けて生きている」と記述している（ibid.：182-184）。

(18) 温泉の企画は、何度か催されており、「おっぱいのない人も、ある人も、再建した人も」「みんな『エイヤッ!』と、温泉に入りましょう」と案内がなされている（11号）。

(2号),「患者が主役の医療制度」(6号),「知りたがりのガン患者」(7号)などと医療の「あるべき姿」について述べられていたが,定期的な勉強会が開催されるようになり,「ブーゲンビリア」の中で,乳房再建に積極的な医師などの話が掲載されるようになると,「患者は主役」という表現が用いられなくなってくる。同時に,「ブーゲンビリア」に寄稿している患者間で先輩と後輩(もしくは先生と生徒)に似た関係が成立するようになってきた。そこでは,教えあうことで不足している医学知識の交換を行う方向へと変容してきている。

「絵子のティータイム」と個人現象

最後に,「ブーゲンビリア」で徐々に連載されるようになる「絵子のティータイム」について,考察してみよう。この「絵子のティータイム」は,のちに連載化され,2015年3月号(通巻191)まで続くことになる。創刊号から33号までのうち,この連載があるのは,10号から12号,14号から15号,17号から19号,21号,23号,29号,31号,33号である⁽¹⁹⁾。

ここでは,特に特徴的な個人現象を扱うことにしよう。

内田は,「趣味=生きること,何があっても,人間っていいナー。やっぱり人生って素晴らしい!!」と10号の冒頭で述べている。乳がんで乳房を切除したにもかかわらず,「趣味は生きること」と言い切るところに,内田の「とってもノーテンキな性格」と,「当事者として乳ガンに向き合」おうとする姿勢が読み取れる(内田1996:3)。

一方で,内田は,原因が分からぬまま落ち込んでいた(内田は「穴ボコ」と表現する)理由について,「私の心がヒメイをあげ」ているからだと告白する。続けて,私は「『神を待っているのか。あるいは,最初から本当は何も待っていないのか』せんざい意識の中に存在する遠い記憶と,等身大の私とが時々交錯する」と記している(「ブーゲンビリア」10号)。さらに「光に反射し,キラキラと輝きみどり色の麦畑」を想像し,それを「私の魂の原風景」として読者に告白する。この告白後,内田は「時おり,その津波のように押し寄せる『しーん』としたなにかに耳を傾けるようになり,「『しーん』とした深い沈殿物をすなおに受け入れ,慈しむことにした」ことで,正体のはっきりしない期待と不安を受容したという。

ところで,社会学者の作田啓一は,『ルソー 市民と個人』において「行為の未来指向性が明らかな好例として書くという行為を取り上げ」,「作家は書くことによって,まだ自己そのものではないがそうなりつつある自己を確認しようとしている」と述べている(作田2010:18)⁽²⁰⁾。また「『告白』という文学的表現も,過去の単なる再現ではない。もちろん,ルソーは過去の諸事実に動かされて『告白』を書いた。だがまた,そうならうとしているルソーの自己が『告白』を書かせたのであり,そうならうとしている自己が別の自己であったなら,彼は『告白』を書かなかったかもしれないし,別の『告白』を書いたかもしれないのだ」と指摘する[ibid.:18-19]。

(19) なお,「絵子のティータイム」という連載名になったのは,10号からであり,当初は「えい子よりみなさまへ」であった(3号より開始)。

(20) 社会学者のG. H. ミードによれば,自己とは「実体というより,身振り会話が生物体の内部に内面化されてきた過程」である[Mead 1934 = 2005:191]。ここでの自己は,近代的自己のことであり,自己再帰性によって自己の内部へ他者のまなざしを変換することによって成立したものである。

つまり、内田は得体の知れない期待と不安を書くことによって、「等身大の私」を確認しようとしているといえる。内田が原風景と言っているものは、実際に内田が見た風景なのかはわからないが、「とってもノーテンキな性格」と、「当事者として乳ガンに向き合」おうとする姿勢がこれらの風景を書かせたのであり、全てを受け入れようとしていることの表れである。

おわりに

本稿では、ミニコミの歴史、環境アーカイブズが所蔵しているミニコミ資料の概要について確認した後、研究資料としての利用例として、「ブーゲンビリア」（創刊号から32号）の考察を行った。最後に、ミニコミ資料利用の展開の可能性について言及しておきたい。

ミニコミ資料は、「読みもの」としても非常に面白いが、種類や内容も多岐にわたり、漠然と「読みもの」としての出会いを求めることは、困難である。そこで、最も利用し易いと思われるのは、やはり研究利用である。例えば資料の内容（ジャンル）や発行地域などに焦点を絞り、補助的に利用（調査対象の確定など）する方法がある。しかし、本稿では、ミニコミ資料自体の分析を試みた。つまり、闘病記を分析しようとする際、ミニコミ資料は、その闘病記を読み解くための情報の補足、確認など補助的利用になりがちであるが、闘病記を補助的資料と位置づけたのである。

その結果、会の中心メンバーである内田絵子が連載していた記事に着目し、内田の「個人現象」についても考察を広げることができた。また、24号以降についても本研究との比較を行いながら、分析を継続することが可能である。特に「絵子のティータイム」は、連載が終了するまで18年間にわたって蓄積されてきた。これは、乳がん患者会を立ち上げ、活動を行っている内田絵子とその協力者たちの資料でもあり、また乳がん寛解者内田絵子としての資料にもなる。

しかし、幾つかの課題も残されている。一つは、研究利用以外での利用可能性を模索することである。例えば、美しく装飾されたミニコミ資料などは、他のミニコミよりも劣化の問題が深刻であるものの、デザインの面からも評価できる。

次に、研究利用内における、さらなる利用可能性である。特に、個人が作成したミニコミ（個人誌）は、その個人の諸特徴の把握を可能にする。また、その個人がある特徴を持った存在として成り立っている諸事情や諸契機についても析出可能にする。以上の点については、今後の課題とした。

（のぐち・ゆりこ 法政大学大原社会問題研究所環境アーカイブズリサーチ・アシスタント）

【謝辞】 本稿の執筆にあたり、市民アーカイブ多摩の平川千宏氏、長島祐基氏から有益なコメントをいただいた。また、宮島喬客員研究員ほか「大原社会問題研究所月例研究会（2016.04.17開催）」の出席者から助言を受けた。記して感謝申し上げたい。

【引用文献】

- 辺輝子（1976）「ミニコミ・ウーマン・リップの季節——報道されるリップから主張されるリップへ」田村紀雄編『ミニコミの論理「知らせる権利」の復権』学陽書房、61-73頁。
- 荒井容子（2014）「『市民活動資料』センターと市民運動を支える社会教育」『大原社会問題研究所雑誌』

668号。

医療人類学研究会編（1992）『文化現象としての医療』メディカ出版。

内田絵子（2009）「オバサン力で変えちゃおう！がん医療」『月刊がんサポート』1月号-12月号。

内田絵子（2011）「オバさんの政界体当たり対談」『月刊がんサポート』1月号-12月号。

内田絵子（1996）『メイド・イン・シンガポールのおっばい』北水。

内田絵子編（2001）『おっばいが二つほしい 私が選ぶ乳房再建』北水。

内田絵子と女性の医療を考える会「ブーゲンビリア」創刊号-32号。

江頭晃子（2014）「資料保管運動から資料センター開設まで」『大原社会問題研究所雑誌』668号

串間努編（1999）『ミニコミ魂』晶文社。

作田啓一（2010）『ルソー 市民と個人』白水Uブックス。

Mead, G.H. (1934) Mind, Self and Society, 稲葉三千男他（訳）『精神・自我・社会』青木書店2005。

杉山弘（2014）「東京都立多摩社会教育会館旧市民活動サービスコーナー資料の移管経緯と『市民活動資料・情報センターをつくる会』の活動」『大原社会問題研究所雑誌』673号, 3-9頁。

田村紀雄（1976）「序 一つのミニコミ論」田村紀雄編『ミニコミの論理 「知らせる権利」の復権』学陽書房, 1-10頁。

田村紀雄（1977）『ミニコミ 地域情報の担い手たち』日本経済新聞社。

田村紀雄・志村章子（1985）『ガリ版文化史 手づくりメディアの物語』新宿書房。

俵萌子（1997）『癌と私の共同生活』海竜社。

長島祐基（2016）「都立多摩社会教育会館市民活動サービスコーナー資料とそのアーカイブズ化に関する考察」『国文学研究資料館紀要 アーカイブズ研究篇』12号, 75-95頁。

南陀楼綾繁（1999）「われわれはなぜミニコミをつくるのか？」串間努編『ミニコミ魂』晶文社, 10-23頁。

平川千宏（2002）「市民運動・住民活動資料の収集、提供、保存」『山梨英和短期大学紀要』37号, 77-92頁。

平野泉（2013）「研究資源としての『ミニコミ』：立教大学共生社会研究センターの事例」『情報の科学と技術』63巻10号, 421-425頁。

町村敬志（2012）「市民的アクティビズムの組織的基盤を探る——ミニコミアーカイブズの効用」『社会と調査』8号, 38-46頁。

丸山尚（1985a）『ミニコミ戦後史 ジャーナリズムの原点を求めて』三一書房。

丸山尚（1985b）『「ミニコミ」の同時代史』平凡社。

水野節夫（2000）『事例分析への挑戦 '個人' 現象への事例媒介的アプローチの試み』東信堂。

山崎章郎（1990）『病院で死ぬということ』主婦の友社。

山崎章郎（1993）『ここがぼくたちのホスピス』東京書籍。

山家利子（2014）「資料と活動の交流拠点だった「都立多摩社会教育市民活動サービスコーナー」」『大原社会問題研究所雑誌』668号

やみたけ（1999）「ウェブと紙のミニコミ」串間努編『ミニコミ魂』晶文社, 259-266頁。

渡辺潤（1981）『生きるためのメディア図鑑』技術と人間。

・WEB

「NPO 法人ブーゲンビリア」ウェブページ（2016.05.02）

「環境アーカイブズ」ウェブページ（2016.05.02）

国立がん研究センターがん対策情報センター「がん情報サービス」（2016.05.02）

ベトナムに平和を！市民連合編『ベ平連ニュース・脱走兵通信・ジャテック通信・縮刷版』ベ平連（PDF版 2016.05.02）